
古本屋店員の非日常的な日常

響月柚子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

古本屋店員の非日常な日常

【Nコード】

N7572P

【作者名】

響月柚子

【あらすじ】

個性的な店員達と共に送る、とある古本屋店員の普通じゃない日常。

序章

僕は昔から本が大好きだった。

小さな頃から絵本や童話、小説と、わりとジャンルを問わず読み続けてきた。

だから今の職業に不満はなかったし、寧ろ嬉しいくらいだった。

…ただし、もう少し普通の古本屋だったら、ね…。

某県某所に存在する古本屋「安心堂」。

何やら安直で逆に安心出来ない感じのする名前だが、これはまあ創業時以来からなので今更どうしようもないし、諦めている。

其処で僕、安藤良基^{あんどうよしき}は、店員として働いている。

この店は僕の祖父の祖父だかが始めたそうで、一応その界限では老舗にあたるらしい。

「古本屋」というわりには本以外にもCDやDVD、ゲームなんかも取り扱っていて、専門的な本を扱う所謂「古書店」ではない。

店長は僕の祖父、安藤幹久^{あんどうみきひさ}で、今年でもう70は超えるというのに全く衰えを感じない。

とにかく本が大好きで毎日楽しそうに仕事をしていて、僕が本好きになったのはきつとこの人も関係しているだろう。

「良基、ここにおったか。店開けるから、掃除頼む」

「あ、じいちゃん。わかった、今行くよ」

今日も一日が始まる。

とても普通とは言えない、僕の日常が…。

1：相川美奈の場合

普通の古本屋と違うところ。

その一つが、個性豊かな店員達である。

例えばこの人、あいかわみな相川美奈さん。

安心堂に勤めているアルバイトやパートの人の中では割と古株の方にあたる。

しかし今年で30になるというのに、その外見はまるで女子高生と言っても過言ではない程可愛い。

小柄な身体は重たい本の山を抱えることの多いこの職業には向いてなさそうだけど、意外と力持ちでその点心配はいらない。

…まあ、一つ問題があるとしたら、それは。

「つきやーッ！」

「み、美奈さんっ?! どうしましたかっ？」

突然の悲鳴に良基が慌てて駆け寄ると、美奈はカウンター下でぶるぶると震えていた。

美奈は震えながら、無言でカウンターを指指す。

その机上には、ピンク色な雑誌やDVDが所狭しと置かれていた。

女の人のあられのない姿が沢山載っている、所謂成人向商品である。

「…もしかして、またですか？」

「……よ、良基くん…だ、だって…っ」

美奈はその大きな瞳に一杯涙を溜めていて、それは今にも零れ落ちそうだった。

その様子は端から見ればとても可愛いのだが、今は仕事でちゃんと働いて頂かないと、困る。

「毎回言ってますよね？仕事なんですから、割り切って下さい」
「うう…頭ではわかってるんだけどお…」

―そう、このお方は酷く成人向商品が苦手なのだ。

そりゃあ確かに男性向が多くて、女性には取っ付き難いモノだとは思うけど、毎回叫ぶのは止めて頂きたい。

その場に居合わせたお客様が驚いてしまうし、僕の身も持たない。

「とりあえずここは僕がやりますから、美奈さんはあちらをお願いします」

「いつもごめんね、良基くん…」

「気にしないで下さい。それよりホントいい加減、慣れて下さいね」

「…う…ど、努力します…」

…とかなんとか言ってるけど、まだ当分この人は慣れないんだろうなあ…。

後ろの方で商品の加工を始めた美奈を横目に、良基は作業を開始した。

2：桃瀬優里の場合

「おつはようございまーす！」

「おはようございます、優里さん」

元気よく出勤してきたこの人は、ももせゆうり桃瀬優里さん。

いつも明るく元気で、この店のムードメーカー的な存在だ。

活発でハキハキしている彼女は、お客さんのウケもいい。

働きっぷりもまだ20歳という若さのわりにはよくて、頼りになる存在でもある。

そんな彼女の問題点といえば、ただ一つ。

「あつ?!美奈さーんっ、今日も可愛いですねっ」

「ひゃあああッ?!」

同性に対してやたらスキンシップが過剰過ぎること、だ。

今も物凄い勢いで美奈さんに抱き付いている。

「優里さん、いつも言ってますけどもうちょっと抑え目をお願いします。美奈さん、固まってますよ?」

「え?あ、すみません美奈さん。あんまりにも可愛かったから、つい」

つい、で済まされるような行動ではない気がするんだが、その辺は一々突っ込んでいると身が持たない。

この程度のことはこの店では日常茶飯事なので、僕もじいちゃんも見て見ぬフリをしている。

「とは言っても、じいちゃんが店内にいることなんて、実はあんまりないんだけど。」

「っつ、っつ、...!」

パクパクと口を魚のように動かす美奈さんは確かに可愛いけれど、

あんな勢いで向かって来られたらいくらなんでも怖いだろう。
真っ赤な顔で僕に視線を向けてくる美奈さんは、未だに優里さんの腕の中に収められている。

そろそろ離してやったらどうですか、と提案してみるべきか。
何か本当、可哀想だし。

―そう、桃瀬優里は女の子が大好きだった。
特に、可愛い女の子が。

別に彼女は特別、男が嫌いな訳ではない。

現に店長の幹久や良基とも上手くやれている。

…だが、どうしようもなく女の子の方が「好き」なのである。

彼女曰く、「だって、しょうがないじゃないですか！こんなに可愛いんですよ？！可愛いのは正義ですっ！」らしい。

可愛いのは正義、と言われてもイマイチピンと来ない良基だが、まあ言いたいことは何となくわかるような気がした。

「…そろそろ離してあげて下さいよ。それに、仕事もして下さい」

「あ、そうでした。すみません！」

基本はちゃんと聞き分けも出来るし、いい子なんだけど。

偶に暴走してしまうのが、少し怖かった。

3：大谷瑞希の場合

個性的な店員ばかりで困るのだが、この人はその中で特にすごい。何がすごいかって、もう全体的に？

「うっもっ！何でこんなに重いのか、これえっ？！」

「瑞希ちゃん、大丈夫？私が持とうか…？」

今も一応仕事なのに、大声であんなこと言っちゃってる彼女…いや、彼は、大谷瑞希くん。おたにみずき

この仕事はバイトで、本業は大学生だ。

何故彼、と言い直したのかと言うと、彼はかなり特殊なのだ。

一応戸籍上は男なのだが、見た目は完全に女の子、という、何だかよくわからないお人だ。

まあそのおかげで女の子ばかりのこの職場にもすぐに馴染んでくれたのだが。

「あつ良基さんちよつと！女の子にこんな仕事させないで下さいよ、全く！」

君は正確には女の子じゃないんだけどね…うん。

「？私は平気だよ、瑞希ちゃん。このくらい全然重くないし」

「えっ嘘っ？！美奈さんすごいっ！美奈ちゃん大好きっ」

「えへへ、ありがとう」

美奈さんはそう言ってひよい、と瑞希さんの持っていたダンボールを抱える。

どこからそんな力が出るのか本当、毎回不思議だ。

僕でも結構大変そうな量のダンボールをいとも簡単に持ち上げた美奈さんは、そのまますたとそれを倉庫へと持っていつてくれた。本来は男である僕が彼の仕事なんだろうけどまあ、適材適所、というヤツだ。

「それにしても…君は何で力仕事嫌いなのにこの仕事選んだの…バイトなら他にも色々あるでしょ？」

前々から思っていたのだが、瑞希さんならわざわざこんな古本屋じやなくてももつと可愛らしいバイト先があると思う。

それなのにこんな所でバイトしている理由がわからなかった。

「えー…だってココ、服装自由でしょ？結構他のところ、服装厳しいんですもん…」

「…え、そうなの？」

てつきり可愛い制服があるカフェだとか、そういう飲食関係の方が好きそうだと思っていたんだけど。

「そうなんですよ！ボクこんなに可愛いのに、バーテンの格好させるとか言っんですよ？！しんっじらない！」

あー…そういうことか。納得。

確かにここなら服装はとやかく言わないし、男が女の服を着ていてもまあ怒りはしない。

一応接客業だから身だしなみは大切だけど、他のところよりは甘いだろう。

「…なるほどね。よくわかった。熱くなるのはいいけど、そろそろ仕事しようね」

「ちえっ…はい」

良基がそう注意すると、瑞希は不満げだが仕事を再開した。

とある日、こんな日常？

古本屋「安心堂」は、年中無休で営業している。

それは土日とか祝日とか、年末年始だろうが関係なく（むしろそういう時程稼ぎ時だ）、サービス業としては徹底している方だと思う。

個人経営なんて適当なモノだろうとお思いかも知れないが（事実じいちゃんは適当だ）、現実問題そんなに適当にやっていたら潰れてしまう。

それなりに適宜にやっている、と言える。

そんなだからここで働く店員達には、土日とか祝日とか関係なしに出勤して頂くことになる。

…もちろん一応社員（？）な僕には基本、平日休みしかない訳だが。

「はあーっ…休みなのに朝からとかマジっらー…」

「……一応責任者の前で、よくそういうと言えるね…」
とある休日の開店前。

開口一番そう呟く瑞希くんは、思わずそう突っ込む。

しかし瑞希くんは悪びれる様子もなく、そのままこう続けた。

「だって昨日、深夜までレポート作ってたんですよ？！なのに9時30分出勤とか、全然寝れてないし…っ」

確かにそれはお気の毒な気がするが、勉学は学生の本分。

それにそんなにキツイならシフト提出の時に調整すればよかったのだ。

ある意味自業自得である。

「それは大変だったろうけど君ももう子供じゃないんだし、少し我

慢することも覚えないと」

社会は厳しい。

瑞希くんはまだ大学1年生だけど、いつか就職して社会に出るのだ。その練習はしておいた方がいい。

「うえゝ…ボク一学生でいたい…」

「そんなこと言わない。皆いつか絶対社会に出るんだから」
僕だってそうだ。

瑞希くんと同じように大学に通いながらじいちゃんの手伝いを始めて、そして卒業してそのまま就職したから。

「ほらそんなこと言ってないで、店開けるよ」

「はい…」

今日は休日だ。

きつとそれなりに忙しくなるだろう。

「さて…頑張らないとね」

シャッターを開けて、一言そう呟く。

ふと見上げた空は、雲一つない晴天だった。

とある日、こんな日常？

「いらつしゃいませー」

瑞希くんの愚痴を聞きながらなんとか開店準備を済ませた僕は、そのまま店のシャッターを開けた。

休日とあって、しばらくするとお客様の数が増えてくる。

それに伴って忙しさも倍増して、とてもじゃないがお喋りなんてしてられなくなる。

「ありがとうございます。お預かりします」

レジの回数も多くなってきた、慌ただしくなる。

「おはようございます」

「あ！優里さん、おはようございます。今ちょっと忙しいんで、すぐ着替えて出て来てもらいませんか？」

「あ、はい！今日は忙しいみたいですー！」

「そうなんですよ、すみませんがお願いします」

丁度その時優里さんが来てくれたので、出勤時間はまだけどすぐに出てきてもらうことにする。

こういう時ホント申し訳ないなってしまうけど、その分時給は出すのでまあおあいこだろう。

挨拶もそこそこにバックに消えていった優里さんは、すぐにエプロンを付けて戻ってきた。

「おはようございまーす！」

「すみません優里さん、今日も一日よろしくお願いします」

「いいいえ、こちらこそよろしくお願いします」

申し訳なくてそう謝るが、優里さんはそれに大丈夫ですよ、と言ってにこりと微笑んだ。

（ああ、癒しだなあ…）

普段忙しくて滅多に異性と絡まない僕は、こういう異性の可愛らしい笑顔を見るだけで大分癒される。

「…良基さん、仕事溜まってますよ。優里さんも、いつまでも喋ってないで仕事する!」

「うつ…ごめん瑞希くん…頑張るよ」

先程から黙って仕事をしていた瑞希くんが、我慢できなくなったのかそう叫ぶ。

「あつ瑞希ちゃんじゃーん!おっはよー!」

「おはようじゃないです!ちょ、抱き付かないで下さい!」

「いいじゃんいいじゃん〜瑞希ちゃん可愛いし〜」

「よくない!やっていいことと悪いことがあります!」

…また始まった。

この二人は会う度にこんなやり取りをしている。

もうどっちがいいとか悪いとかじゃなくて、多分相性が悪いんだと思う。

だからなるべく二人が一緒にならないようにシフトを組んでたんだけど…

「あーもう、何でこんなにかわいいのー?!」

「やーめーてーくーだーさーいーっ!」

…あー…ごめん瑞希くん…。

そんな目で見られても僕、どうすることもできないよ…。

優里さんは一度こうなると、本人が満足するまで止められないし。

「っはあゝ可愛かった。満足満足」

「……」

しばらく瑞希くんを撫で繰り回した優里さんは、やっと満足したらしく彼を解放した。

ようやく解放された瑞希くんは、朝見た時よりも更にげんなりとしていた。

じろりと無言で睨まれて、「こんなシフト組んでんじゃねえ！」と目で訴えられている気がして、「ごめん」と両手を合わせた。

「…それじゃそろそろ、仕事してくれるかな…瑞希くんは休憩行つていいから」

「あ、はい！」

「…はあ」

優里さんは元気よくそう返事をするが、反対に瑞希くんははあ、と大きなため息をつく、そのままバックへと消えていった。

とある日、こんな日常？

「はぁー。終わった終わった」

「お疲れ様です、二人共」

「お疲れさまー」

閉店時刻。

店のシャッターを閉めて、良基は二人にそう労いの言葉を掛けた。

「ホントですよ、もう。何でこんな忙しい日にこんな薄いシフトなんですか！」

「はは…まさかこんなに忙しくなるとは思わなくって…ごめん」

瑞希くんの言葉に、本当に申し訳なくなる。

僕だってこんなに忙しくなるのがわかってたら、こんな無茶なシフトは組まなかったんだけど。

今日は驚く程混雑していたのだ。

確かうちの店は”知る人ぞ知る”古本屋だったはず、なんだが。

「頑張ってくれたお礼に、ジュースでも奢るよ」

「えっマジで？！良基さん太っ腹〜！」

「ありがとうございます！」

あまりに申し訳なくて、二人にそう提案する。

そして店のシャッターを閉めると、近くにある自販機まで向かう。

「何でも好きなの、一つ買ってあげますよ」

「やったあ〜」

「すみません、良基さん」

…さっきから思っていたが、この反応の違い。

瑞希くんはもうちょっと、年上や目上の人への対応を勉強した方がいいだろう。

それに比べて優里さんはもう本当、フリーターなのが勿体ない程完璧だ。

「良基さん、ボク、コーラね〜」

「はいはい。優里さんは？」

瑞希くんのコーラを買いながら、優里さんに尋ねる。

「そうですねー…じゃあ、おっちゃんを」

「了解」

指定された飲み物を買って、優里さんに手渡す。

「ありがとうございます！」

「…今日は本当にありがとね、二人共」

自分のものも買っと、僕は改めて二人にそうお礼を言った。

「いいんですよ」

「…べ、別に。ちゃんと働いた分は対価貰うし」

対照的な反応。

それがとても二人らしくて。

「あはは。今度からちゃんと考えてシフト組むから、これからもお願いします」

良基は笑いながら、すっかり暗くなった空を仰いだ。

古本屋は仕入れが命？

突然ですが、古本屋はお客様仕入れからの買取が命です。

「…今月は買取仕入れ、少ないなあ…」

買い取らなければ、そのうち販売商品は枯渇してしまう。

それは我が安心堂にとって、由々しき事態である。

僕は今月の買取推移表を見て、はあ、と一人ため息を吐いた。

大きなチェーン店とかなら、足りない分を他のお店から送ってもらうことが出来るかも知れない。

しかしうちはあくまで個人店であり、自分のところで買い取った分しか商品になり得ない。

「やばいなあ… 今月売上結構いいし、商品足りなくなるかも…」

じいちゃんは例のごとく頼りにならないし、本当どうしよう…。

「良基さん、どうしたんですか？」

と其処に、丁度休憩に入ったらしい美奈さんがそう話し掛けてきた。

「美奈さん… 実は、今月買取仕入れが少なくて…」

「まあ… そうなんですか…」 のほほんとしてるなあ…。

ほんわかした雰囲気は彼女の長所だと思うが、こういう時ちょっと危機感が足りない気がする。

「まああくまでバイトなのだから、其処は怒れないのだけど。」

「買取キャンペーンでもやるか？でもなあ…」

本来こういう事で頭を悩ませるのは、店長である祖父のはずなのだが。

過去のデータも参考にしつつ、一生懸命対策を練る。美奈さんはそんな僕に気を使ってくれているのか（ただ単に興味がないのかも知れない）、黙って静かに休憩している。

過去にも何度かこういう事はあったが、今回のは特に酷い気がする。

「あー… 不安だ…」

ついついそう呟く。

「…そんなにヤバいんですか？」

すると美奈さんは読んでいた文庫本を置くと、遠慮がちにそう尋ねてきた。

「あ、いえ。確かにあまりいい状況ではないですが、何とかなると思いますよ」

…いけないいけない。

もう大分長いとはいえ、バイトの子を不安がらせるようなことを言っちゃ駄目だ。

特にフリーターはバイトが生命線になっているから、もし店が潰れたら…とか、無駄に不安がらせてしまうし。

「今度店長と連絡が取れたら、相談しないと…」

「店長、今何処にいるんですかね？」

「…さあ…一度出掛けると、しばらく帰って来ない人だから…」

しかも身内の僕にさえ何の連絡もなしに、だ。

今でこそ慣れたものの、昔は本気で心配したものだ。美奈さんもう慣れているのだろう。

もうそれ以上追求せずに、再び文庫本へと視線を落とす。

良基も手元の資料に視線を戻すと、さてどうしたものかと更に頭を悩ませ始めた。

古本屋は仕入れが命？

結局何の案も浮かばないまま、数日が過ぎていた。

じいちゃんは相変わらず音信不通で連絡が取れず、このままではマジでヤバいな、と、僕はマネージャールームで一人頭を悩ませる。

「おはようございまーす」

と、一際明るい声が室内に響いて、良基は顔を上げる。

「…優里さん。おはようございます」

もう優里さんそんなじかんの出勤時間だったか。

確か彼女は今日遅番だったから、朝から結構な時間、悩んでいたことになる。

「大丈夫ですか？随分顔色悪いですけど」

「大丈夫…だと、思う」

心配そうにそう尋ねてくる彼女にそう答えるが、その声に力はなく、語尾もつい自信無さげになってしまう。

「…あんまり無理しちゃ、ダメですよ？」

「…ありがとう」

良基さん結構無茶しますから、と続ける優里に、良基は思わず苦笑いを浮かべた。

「はは…手厳しいな」

まるで母親みたいな物言いに、遠い記憶が甦ってくる。

（…両親、か…）

良基は物心ついた頃からずっと、祖父母と暮らしていた。

両親は共働きで忙しく、子供の面倒を見ている暇がなかったからだ。しかしまだ幼かった当時の良基はそれがわからず、よく祖父母に駄々をこねていた。

その度に、怒らず優しく諭してくれた祖父母。

そんな二人には、感謝しても仕切れない。

今の僕があるのは、彼らのお陰といっても過言じゃないだろう。

「良基」

「ほら、今も優しく僕の名前を呼んで……って、ええっ、?!」

「じ、じいちゃんっ?!」

「久しぶりじゃな、良基」

突然響いた祖父の声に、伏せてた顔を思い切り上げる。

するとにこにこ微笑む祖父が、沢山のダンボール箱と一緒に立っていた。

「久しぶりじゃな、じゃないよっ! 何処行っただんだよ!」

「何処って……ちよっと其処まで仕入れに行っただけじゃよ? 言っ
てなかったか?」

……聞いてないよ?!

それじゃあ、ここ数日の僕の悩みは全て、取り越し苦労……?!

「勘弁してよ……」

自由過ぎるよ、じいちゃん……

「まあまあ良基さん、良かったじゃないですか。これで問題は解決
ですよ!」

「あはは……うん、そうだね……」

優里さんの言葉に、力なく頷く。

うん……まあ、仕入云々はもう大丈夫みたいだけだね……僕
の精神疲労が……激しいよ……。

「それより良基、久々にいい買取じゃったぞ!」

幹久は興奮した様子でそう言う。

「じいちゃんの良い買取って、どうせ時代小説だろ? まあそれはそ
れでいいんだけど、もっと広い世代にウケるヤツも入らないと、困
るんだけど……」

それに良基は苦笑いしながら、そう答えた。

「今回は違っぞ! ほら、若い子の……何じやったか……らいとのべる?

とか、ほら、すりーでいーえす、とか言うものとか…大収穫じゃぞ
！」

「…！それ、本当…？！」

じいちゃんの口からは絶対出てこなそうな最新機種の名前に、僕は
思わずそう叫ぶ。

それに幹久は嬉しそくに頷くと、ダンボールの中身を開いた。

その中身を見ながら、とりあえず当分の買取^{仕入れ}は大丈夫そうだと、
良基はほっと胸を撫で下ろした。

棚卸と万引き

万引き。

それは店の種類に関わらず、店を持つ者ならば一度は経験したことのある犯罪だろう。

「……今月も数が合わない」

古本屋「安心堂」の店長代理・安藤良基は、閉店後の店内で一人頭を抱えていた。

店舗では毎月末に棚卸という、商品の数を合わせる作業が行われる。帳簿上の商品の数と、実際の商品の数を比べる、地味に大変な作業だ。

レジの打ちミスや商品の登録ミスで多少のズレはあるものだが、ここ数ヶ月十冊単位で商品が足りていない。

——これは明らかに、犯罪の匂いがする。

「……はあ」

良基はその事実には、思わず今日何度となく出ているため息を漏らした。

お客様のことは、信じたい。

けれど、事実商品は確実に「無くなって」いる。

そして店員達のミスではないということは、つまり……

「……万引き、か」

考えたくない。

けど、残念ながらこの状況はそうとしか考えられない。

「…どうした、良基。帳簿、合わんのか？」

「…じいちゃん…」

珍しく店にいたじいちゃんが、マネージャールームを覗き込みそう尋ねてくる。

「そうなんだよ…ここ数ヶ月、毎月…」

言いながら再びはあ、とため息が漏れる。

やはり入口にセキュリティを付けるべきだろうか？

あれは高いし（金銭的な意味で）、お客様を全く信用していないみたいで嫌なんだよなあ…。

「そうか…良基。接客業の基本は覚えとるよな？」

「うん。『疑わしきは罰せず』だろ？」

どんなに怪しくても、状況証拠だけでは判断しない。

確実な『証拠』を得て初めて、お客様ではなく『犯罪者』になる。

それは良基が安心堂^{ニッ}で働き始めた時に、耳が痛くなる程聞かされた話だ。

じいちゃんは僕の答えに、満足そうに頷く。

「そうじゃ。だからまずは、原因を徹底的に調べる。話はそれからじゃよ」

「……わかってるよ」

そんなの痛い位、わかってる。

だからこうして、閉店後も一人残ってるんじゃないか。

「…頑張れよ、良基」

「…うん」

じいちゃんは時々こうして、僕を試すような言動を取る。

意地悪みただけだけどそれが彼の優しさだって、僕は知っている。

「…さて、もうひと頑張りしますか…！」

そのままマネージャールームを去っていく祖父の姿を見送りながら、良基は再びパソコンと書面へと視線を向けた。

モンスター・ゲスト

客商売のサービス業なら、これまた一度や二度経験はあるであろうこと。

それが、クレーマー（最近の言い方をするなら、モンスター・ペアレントならぬモンスター・ゲストとでも言うのだろうか）だろう。クレーマーだけじゃない。

値札の張り替えや、万引き等。

普通の人を考えるよりも意外と日常的に、店舗には犯罪が溢れている。

それはここ「安心堂」も同じだ。

「お会計一点で、800円のお買い上げになります」

完璧な営業スマイルで、瑞希君がレジ対応をしている。

それを横目で見守りながら、僕はカウンターで買取作業をしていた。

「えっ、800円?! 100円のところにあったんだけど…」

するとそのお客さんは、困ったようにそう呟いた。

「…はっ?」

100円の商品と通常の値段の商品とは、きちんと棚が分けられている。

だからそう簡単に混ざるものではないし、分かり易く表示もしている。

…間違えることは滅多にないと思うけど…

「…申し訳ありません、お客様。100円にさせて頂きます」

こういう時マニュアルでは、瑞希君のようにすることになっている。しかし彼は納得してないだろうな、と思っていると、接客を終えた瑞希君が笑顔のまま近寄ってくる。

「…良基さん」

「何？」

「僕、アイツが普通の棚から本取るとこ、見てたんですけど」

瑞希君はニコニコと笑いながら、小声でそう訴えてくる。

…心の中は多分「ふざけんじゃねえええ!!」って感じで荒れてるんだろぅな…

「そう…でも、『疑わしきは罰せず』だよ。悔しいだろうけど、客商売だから」

「…わかってるんです、わかってるんですけど…っ」
納得出来ない。

それは僕も同じだ。

けれど、世の中は残念ながら正しいこと〃していいことではない。
残念だけど、世界は商人に随分と薄情だ。

「ほら、そろそろ休憩の時間だよ。行つておいで」

そう言つてぽん、と、瑞希君の肩を叩く。

「……はい」

瑞希君は全く納得していない様子だったが、僕の言葉に力なく頷く。
良基はそんな瑞希に優しく微笑むと、自分の仕事を再開した。

モンスター・ゲスト（後書き）

「モンスター・ゲスト」は「モンスター・ペアレント」からヒントを得た造語です。補足までに、レジでこう言われたからといって普通に店員が間違って補充したり、お客さんが間違った場所に本を返したりして起こりうる事象なので、一概にこれとは言えません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7572p/>

古本屋店員の非日常な日常

2011年9月16日11時59分発行